

◆著者リプライ◆

応答 — 「戦後」 に捉われない語り方の方へ —

Response: Out of the Post-war Frame

逆井 聡人
SAKASAI AKITO

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Social Education Centre

キーワード

焼跡 闇市 戦後 在日朝鮮人文学 沖縄

Keywords

Burn-out Ruins; Black Market; Post-war; *Zainichi* Korean Literature; Okinawa

原稿受理日：2020.3.23.

Quadrante, No.22 (2020), pp.89-96.

目 次

- はじめに
1. 李英哲さんへの応答
2. 中野敏男さんへの応答
3. 上原こずえさんへの応答
4. 宋恵媛さんへの応答
5. おわりに — 「戦後」 から離れることについて

1. はじめに

この度は拙著『〈焼跡〉の戦後空間論』（青弓社、2018年）の書評コロキウム「冷戦期東アジアと〈廃墟学〉の射程 — 逆井聡人『〈焼跡〉の戦後空間論』をめぐって」を企画して頂き、誠にありがとうございました。

拙著の「おわりに」にも書いてあることですが、この本の元となった博士論文『焼跡と闇市 — 国民的地景と占領期の空間表象』（東京外国語大学、2016年提出）は、過去にこの海外事情研究所を拠点として行われた数々の研究（特に岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編著『継続する植民地主義 — ジェンダー・民族・人種・階級』（青弓社、2005年）など）が理論的土台となったものです。大学院時代

を通して海外事情研究所にある種の憧れを抱いていたわけですが、まさにその場所で拙著の書評会を開いて頂いたことは私にとって望外の喜びです。

今回のこの企画をオーガナイズしてくださった李孝徳さんは、まだ世に出ていなかった私の博士論文を最初に評価して下さったのですが、書評者選定の際にあたり「とにかく一番呼びたい人の名前を挙げていいよ」と寛大な提案をしてくださったので、お言葉に甘えて是非ともコメントを頂きたい4名の方々のお名前をお伝えしました。その結果、このような豪華なメンバーを書評者としてお招きすることができました。感謝に耐えません。それから、岩崎稔さんにも当日の司会進行役を務めて頂き、光栄でした。運営して下さい海外事情研究所の皆さまにも御礼申し上げます。

さて本稿では、当日にご発表いただいた4名の書評者のコメントに対する応答を書かせて頂こうと思います。また、上原こずえさんと宋恵媛さんからはお忙しい中、ご論考をお寄せ頂きましたので、お二人にはその論考への応答も含めて書かせて頂こうと思います。



2. 李英哲さんへの応答

最初は李英哲さんのご発表への応答ですが、応答に入る前に、李さんのご研究と拙著との関わりを簡単に述べさせて頂きたいと思います。李英哲さんは日本近代文学がご専門で、特に「『播州平野』試論——「東へ」向かう朝鮮人とは誰か?」（朝鮮大学校編『朝鮮大学校学報』2008年）というご論考は、拙著「第7章「居たたまれなさ」を超えて——宮本百合子「播州平野」をめぐる「戦後」の陥穽」の直接的な先行研究であっただけでなく、本書全体をまとめるにあたっても戦後文学の中の朝鮮人表象という問題を考える上で大きな示唆を受けたものです。李さんはご論考の中で、敗戦直後の日本の知識人が朝鮮人を認識する際に「すでに解放された民族」という前提を持っていたこと、それ故に「日本」と「朝鮮」が恣意的に切り離され、植民地支配期から継続して展開される政治社会的状況と具体的な朝鮮人運動家たちの日本での取り組みが無視されてきたことをテキスト分析から明確に提示されています。

拙著第7章では、李論考の問題提起に応答する形で、宮本百合子『播州平野』を、日本人と朝鮮人の出会い直しの可能性が刻まれたテキストとして評価し直すことを試んでいます。つまり、「新しい戦後日本」を構想する際に現在まで流通してきた単一民族的神話に支えられた戦後空間ではない、より多元的な民族的想像力によって作られる社会空間を構築できた可能性を孕んだテキスト、という評価の仕方です。李さんの当日のご発表では、こうした私の『播州平野』の読み直しを踏まえた上で、さらに志賀直哉「灰色の月」（1946年）、中野重治「四人の志願兵」（1947年）、高史明「闇を喰む」（2004年）、北野武監督『アウトレイジ』（2010年）など、戦後から近年までの小説や映画作品における朝鮮人表象の新たな読みの

可能性を提示してくださいました。

拙著では、基本的には1952年までの米軍占領下での小説や映画における都市空間表象を考える、というように時間的に限定した上で議論を進めましたが、李さんのコメントを聴きながら、自分が設定した「^{ナショナルランドスケープ}国民的地景としての〈焼跡〉」という理論的なスコープが時間的にかなり広い幅に——「戦後」と呼ばれる時代を通して応用可能なことを改めて理解しました。もちろん、そうした展望の上で私もこれまで考えてきたのですが、具体的に自分が設定した時期以外のテキストで分析を試みたことがなかったのも、李さんが拙著の枠組を使って実践してくださったことは、今後の研究の展開の可能性の確認に繋がりました。

また、李さんが近年手掛けている戯曲の創作の一端を披露して下さり、創作のテーマと拙著の民族運動の捉え方——「濁酒」を媒介に女性たちの「行為主体性」を積極的に評価していくこと——に共通項があることを示してくださいました。実のところ、李英哲さんとはこれまで面識がなく、論文を読んだだけで、今回初めてお目にかかることができたのですが、李さんの現在の問題意識に近づけているのかも知れないということを感じ、光栄に思いました。

それからご発表の最後の方で、拙著の問題意識をさらに別の著作と関連づけながら拡大できる可能性を提示してくださいました。特に「関東大震災後に立案された「帝都復興計画」；朝鮮人虐殺の記憶をならしてしまった痕跡・経緯があるか?」¹という点に関してですが、この書評会の後に発表した拙稿²でまさにこの問題を扱いました。その論考では今和次郎の考現学における近代都市空間の捉え方に注目したのですが、今は都市を歩く人々や市井にあふれる日用品などを「あるがままにみる」ことを自身の立ち上げた考現学の基礎とします。しかし、この考現学が始まるのは関東大震災

¹ 李英哲「逆井聡人『〈焼跡〉の戦後空間論』をめぐって（当日配布資料）」、2019年3月17日、2頁。

² 逆井聡人「考現学と帝国主義——今和次郎の視線について」『現代思想』2019年7月号。

直後であり、今自身が焼跡を逍遙して様々な記録をとるのですが、彼の見る目には朝鮮人が写りません。彼はその時期朝鮮総督府の命で朝鮮の家屋を調査しに行っている³にもかかわらず、日本での著作に朝鮮人の姿はありません。視界から帝国日本の植民地支配を示唆するような物事と人々を排除することによって、今和次郎の帝都の近代空間は構築されます。李さんがご指摘の後藤新平の「帝都復興計画」もそのような意識の延長線上に位置付けられるものだと考えます。

このことから〈焼跡〉的空間概念は必ずしも戦後に生まれたものではないということが考えられるでしょう。と、するならばやはり近代日本を通して形成された民族的区分——常に日本人が盟主として位置づけられ、「アジア」が下位区分として取り込まれるようなシステムにまで思考を広げなければならない、という李さんのご指摘があるのだと思います。権赫泰さんが批判する丸山眞男の「捨象の思想化」⁴の問題や梶村秀樹の「二重の課題」と拙著との関連についても李さんはご発表で触れられていましたが、この「近代化」と「アジアの連帯」が接合するときの危うさについて、どう考えるのか、という今後やるべき宿題を頂いたように思います。

それから、第5章で田村泰次郎「肉体の門」を論じた際に、私が占領空間のことを「新植民地主義」という用語を使っていることが適当であるか、という指摘、あるいは第9章で1949年の朝鮮学校の強制閉鎖以降に在日朝鮮人による民族教育運動が停滞した、というような表現への疑義も頂きました。これらに関しては、全くの私の勉強不足で、不用意に書いてしまったと反省しているところです。今書くとしたらこのような書き方はしないと思います。

李英哲さんには、突然の依頼にもかかわらず

ず丁寧な拙著を読んで頂き、誠に感謝しています。また現在李さんの取り組んでおられる活動と私の研究が様々なところで結びつくことを教えていただいたので、引き続き学ばさせて頂ければ幸いに思います。

3. 中野敏男さんへの応答

今回書評を中野さんをお願いした理由は、私が修士1年生の時に読んだ中野さんの『現代思想』に掲載された「〈戦後〉を問うということ」⁵という論文⁵に強い影響を受けたからです。ちょうど修士論文のテーマを決める時期だったために、この中野さんの論文はその後の私の研究の方向性を決定づけるものになりました。

中野さんのこの論文は2001年に書かれたものですが、ちょうど90年代の言論界においてポストコロニアルの観点から日本の植民地主義が残した傷跡を再認識する期間があり、その総括的な意義を持ったものでした。日米関係に重心を置いた偏った世界認識への鋭い批判であり、〈戦後〉の問い直しはアジアへ向き合うことなしには成立しないことを明示する中野さんの議論は、今思えば日本が9・11同時多発テロやアフガン、イラク戦争を経てさらなる歪な日米関係の泥沼に嵌っていく直前に出されたものであり、現在の日本社会とは違う、あるべき社会を追求できる可能性を持っていたからこそそのものだったのかもしれませんが。私がこの論文を読んだのは、ちょうど2008～2009年頃であったと記憶していますが、これも歴史化してみるなら民主党政権発足前夜であり、リベラルの盛り返しが期待できた時期であるからこそ、読んだときに強く心に響いたのかもしれませんが。そこからさらに約10年を過ぎた今、既に法治国家の原則すら守れない現状には目を覆うばかりではありますが、本稿を書きなが

³ その調査の成果として『朝鮮部落調査特別報告第一冊（民家）』（朝鮮総督府、1924年3月）が上梓されている。

⁴ 権赫泰「捨象の思想化という方法——丸山眞男と朝鮮」、権赫泰・車承祺編『〈戦後〉の誕生』中野宣子訳・中野敏男解説、新泉社、2017年。

⁵ 中野敏男「結び 〈戦後〉を問うということ——「責任」への問い、「主体」への問い」『現代思想』2001年7月号。

ら、やはりもう一度、中野さんの論文の地点まで立ち戻らなくてはいけないと考えています。

中野さんの当日のご発表は、前半部で拙著の理論的枠組みの整理を、後半部では拙著が提示した〈闇市〉の可能性を、中野さんご自身の「家族史」に引き付けて展開することでした。前半部の中野さんによる理論の整理を伺いながら、博士論文執筆中に、指導教官や先輩、そして研究仲間からよく指摘されていた問題を思い出していました。それは、私が論じる〈焼跡〉や〈闇市〉というのは、実際の場所のことなのか、それとも言説上の、あるいは作品上の虚構の空間的概念なのか、という問いでした。私はその質問に対して明確な答えを返すことが出来ず、最後まで悩んでいたのですが、最終的に捻り出したのが国民的地景^{ナショナル・ランドスケープ}という言葉でした。地景という言葉を使った理由は、もし空間^{スペース}と言ってしまったらそれは抽象化された、現実の場所から切断されたものという性質が強くなり、もし場^サ（所）^{イト}としてしまえば、個別性の意味が強くなり、「日本人が共有する」という意味でのナショナリズムとの均一的な繋がりが見えにくくなってしまったと思ったためです。焼跡や闇市は、具体的に敗戦後の日本に実際に存在したものではありますが、戦後という時代を通じてその場の具体性や歴史性が剥奪、あるいは別の意味が付与されたものでもあります。一方で、国民は仮構された意味において〈焼跡〉や〈闇市〉を理解し、現実になぞという空間があったのだらうと記憶させられています。この、現実と虚構の間にある概念として地景^{ランドスケープ}という語を使うことになりました（後で、上原さんへの応答の際もこの地景^{ランドスケープ}について考えることにします）。

中野さんは私の方法論が、「歴史研究」が持つ「体験」、「言説」、「評価」の「三視座構造」から「表象研究」がもつ「体験」、「創作」、「批評」、「評価」の「四視座への重層化」であると整理してくださいました。おそらく、歴史研究における「言説」というレベルを、「言説の意図」

と「言説の無意識」へと分化する表象研究の特徴のことをご指摘されたのだと思います。つまり、一次資料もある種の文学テキストとして読んでしまおうという方法です。私が地景^{ランドスケープ}という語を選択したのも、単に〈現実 vs. 虚構〉ではなく、「テキストをどう読解するか」というもう一つの層を挿入する必要性を感じたからである、ということの中野さんのご発表によって今更ながらに気がつくことが出来ました。

後半部の中野さんの家族史の話は、私の〈闇市〉概念と「庶民の共犯」という問題を繋げることで展開されたものでした。庶民の歴史を掘り起こすことで露わになる個々人の精神活動は、民衆と権力の関係が従来の戦後史観で前提とされてきたような「抑圧と抵抗」の図式に乗らないことを分かりやすく提示してくれます。中野さんの家族史は、それで既に壮大な物語であり、叙事詩^{エピック}であるように思いました。改めて、歴史研究と文学研究が交差できる可能性にも思えました。今後中野さんは、さらにこの家族史を発展されるご予定であるということをお仰っていたので、また新しい学びの機会を頂けることを楽しみにしています。

4. 上原こずえさんへの応答

上原こずえさんには戦後の沖縄運動史の観点からコメントを頂きました。上原さんと交流が始まったのは、私が博士課程を終え、本書の出版準備をしている時期で、成蹊大学のアジア太平洋研究センターにて約半年の短い期間ではありましたが同僚としてご一緒できました。また幸運なことに、こうして同じ大学でまた同僚としてご一緒できることになりました。上原さんとの会話が始まってから、私は沖縄の戦後史を少しずつ勉強する機会が増えました。「終章」にも書いているのですが、「戦後日本」ではなく、「冷戦のなかの日本」を考える上で沖縄の問題は欠かせないものであるのにもかかわらず、本書では沖縄の問題にほとんど触れることが出来ていません。これも、上原さん

や上原さんの研究仲間との交流の中でますます実感した反省点でした。そのこともあって、書評会当日のご発表と、それから今回お寄せ頂いたご論考の中で、「本書で展開されている議論は、米軍占領にはじまる戦後の沖縄の経験を考察するための多くの示唆を含んでいる」⁶と書いて頂いたことは、私にとって励みになる言葉でした。

上原さんのご論考のなかで語られる占領期沖縄における米軍による土地接収の有様と、開発の正当化のために用いられたレトリックは、本書のなかで私が論じた〈焼跡〉の論理がより明らかな暴力を伴って実行されたことを示すものでした。戦時の戦闘行為によって作られた〈焼跡〉だけでなく、ブルドーザーと家屋焼き払いによって伊佐浜に「焼跡が永続的に生み出され続け」⁷、さらにその上に築かれたインフラや消費文化によって軍事占領という事実から人々の目を背けさせるような構造が返還を経た現在までも継続しているという事実は、〈焼跡〉が単に歴史をどう見るかの認識や観念の問題なのではなく、そこで生きる人々にとっての現実的な脅威であることを改めて思い知らされました。

上原さんが「landscape」に内包される「美化する」——「空間に対する積極的な改変する」という動詞的意味を見出されたことは、私が想定していた「ナショナルランドスケープ国民的地景」よりもずっと生々しい権力の有り様を再認識させてくれました。先の中野さんへの応答の際にも述べたことですが、自分が設定した理論的枠組みへの突き詰めが甘かったことへの反省とともに、まだまだより多くの事態に適用可能であることを教えて頂き、今後の研究のための大きな示唆を頂きました。

そしてまた、〈闇市〉に関しても上原さんのご研究と本質的なところで接続可能であること

も示して頂きました。私が〈闇市〉という空間を一枚岩的な「抵抗の拠点」として評価しなかったのは、もしそのような評価をしてしまった場合、その内部で何が起こっていたかを具体的に見ることの障害にしかならないからです。どの集団においても、内部の権力関係が存在しますし、必然的にその集団の中でより弱い立場に置かれている人たちが生まれます。「権力による抑圧 vs. 民衆の抵抗」という単純な二項対立図式に収斂させてしまうと、それぞれの集団の中での搾取構造を見過ごすばかりでなく、実のところそれぞれの集団を集団として成り立たせている条件が、必ずしも指導している有力者にあるのではないということに気がつけなくなります。

上原さんは、私が本書第9章で論じた在日朝鮮人女性たちの闘いと伊佐浜土地闘争における女性たちの活動を結びつけながら、運動がこうした人々によって担われていったことを述べています。これは権力側にも言えることで、例えば検閲制度が機能するためには、現場の下働きの人たちの個人的な経済事情や忖度が必要不可欠となります。これまで長い間前提とされてきた「抑圧と抵抗」の図式は、近年の様々な研究分野で打ち崩されていますし、「抑圧のグラデーション」とでも言うべき権力の重層性への注目是一个の潮流であると思います。ただ、そうした全体的な研究動向があるなかでも、上原さんが、追い込まれた人々が生きるために連帯すること、（上原さんの言葉を借りれば）「共同の力」を倫理的な根にしようとする点において、私は同じ研究者として特に繋がっていききたいという願いを改めて持ちました。

近日中に、また今度は上原さんのご著書『共同の力——一九七〇～八〇年代の金武湾闘争とその生存思想』（世織書房、2019年）を私

⁶ 上原こずえ「逆井聡人著『〈焼跡〉の戦後空間論』が提起する「戦後復興・開発」を分析する視座」『Quadrante: クアドランテ: 四分儀: 地域・文化・位置のための総合雑誌』第22号、東京外国語大学海外事情研究所、2020年3月。

⁷ 同上。

が書評させていただく機会がありそうなので、その際に今回の議論をさらに発展させたいと考えています。

5. 宋恵媛さんへの応答

今回宋恵媛さんに書評をお願いした理由は、本書の第8章、第9章にあたる在日朝鮮人文学者・金達寿の作品分析に関してコメントを頂きたかったからです。本書のなかでこの部分は、全体の結論を導き出すための「最後の跳躍」的な役割をもっており、最もクリティカルであると同時に、私にとっては大きな挑戦でもありました。私は修士課程、博士課程の前半を通じて、日本人作家の書いた戦後文学を中心に研究してきたために、それまで在日朝鮮人文学についての知識がほとんどありませんでした。しかし、（これは「終わりに」にも書いたことですが）2011年にアメリカの公文書館で闇市関係の資料（この資料をもとに書いた章が第3章「闇市とレイシズム」です）を調査している際に出会ったのが、在日朝鮮人の強制送還をめぐる資料でした。この資料を手にしたことで、あくまで日本人を中心に捉えていた私の戦後観が大きく変わり、博士論文の構想も全く違った方向に転換することになりました。もちろんその時も日本のアジアへの戦後責任に向き合わねばならないということは考えていましたが、漠然と「アジア」と捉えていたために結局のところ戦後民主主義の枠組みの中で考えていたに過ぎなかったのです。つまり、この時点でようやく日本の戦後空間を論じるにあたって、在日朝鮮人の具体的な文化・政治運動を無視、あるいは軽視してしまったら、「戦後」という時代を大きく見誤るということに気がついたわけです。

そこから、乏しい知識の中で、それでも辛うじて知っていた在日朝鮮人文学の代表的な作家である金達寿に飛び付くことになりました。そして数年、金達寿を経由しながら在日朝鮮人史を学んでいき、なんとか一本の論文

を書き上げたのが第8章のもととなった「八・一五以後」論でした。宋恵媛さんのご著書『在日朝鮮人文学史』のために——声なき声のポリフォニー』（岩波書店、2014年）を拝読したのはちょうどその後だったと思います。宋さんのご著書を読んで、また私は頭を殴られたような衝撃を受けました。というのも、私の金達寿論は、まさに宋さんがご著書の中で批判されている、日本語中心主義、男性中心主義、そして権威主義に毒された在日文学論だったからです。そのために、最後の章となった「おかみさんたち」のたたかい」は、その反省から在日朝鮮女性の表象を検討することにしました。そういう意味で、第9章はその時点で私ができる限りの宋さんのご著書への応答でもありました。

とはいえ、言語的な壁や時間的な制約もあり（完全に言い訳ですが）、資料の収集と読み込みという面において覚束ないままの執筆となり、結局金達寿を在日朝鮮人文学の代表として扱うことに留まってしまいました。そのため博士論文提出後も、また本書の出版後も、私は自分の在日文学論の煮え切らなさに不安を抱えたままでいました。今回の書評会のお話を頂いた際に、ここ数年抱えていた不安に正面から向き合う機会を得たと思い、全く面識がなかったにもかかわらず、おこがましくも宋恵媛さん書評をお願い致した次第です。そのような依頼だったにもかかわらず、快くお引き受けいただき、誠にありがとうございました。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、今回宋恵媛さんから改めてご論考をお寄せ頂いたので、そこでまとめてくださった三つの問題について順に応えていこうと思います。

まず一点目の、私の一次資料の文学的（というよりも恣意的な）解釈の問題です。特に、在日朝鮮人が出版した著作に対するGHQの検閲状況に関してご指摘いただきました。宋さんは最初に当時在日朝鮮人の知識人たちが置

かれた言論状況を概括した上で、私が本書のなかで挙げている事例についても関連文献を挙げながら詳細に問題を洗い出してくださいました。まずもって私の絶望的な勉強の足りなさを痛感しましたし、正直なところあまり反論の余地がなく、勉強させて頂くばかりでした。私自身、本書の検閲に関する議論に不十分などところがあることを感じていて、別の論文⁸を書き、今回の書評会の後には宋さんにお送りしていたのですが、宋さんの御論考では、この論文に関しても詳しく検討してくださいました。

宋さんのご指摘の中で明らかになったのは、私が在日朝鮮人に対する検閲の圧力と日本人に対するものとの違いを本質的に理解しておらず、同じレベルで考えていた、ということです。その原因の一つは、やはり日本文壇で活躍していた金達寿しか見ていなかったこと、それ故に別の知識人が朝鮮語で書かいた多数の文章の存在を考慮することができず、当時の在日朝鮮人のメディア空間が日本だけでなく米軍政下の南朝鮮／韓国の言説状況とも結びついて展開するダイナミズムを捉えられていないことにあると理解しました。猛省して、勉強しようと思います。

ただ一つ応答めいたことを言うとしたら、個別の検閲文書に記されたメモなどから下読みをする examiner と、最終決定を下す censor それぞれのレベルにおける価値判断や解釈を読み取ることの可能性は残しておいてもいいのではないのでしょうか。確かに、それを決定づける証拠に乏しいために、どうしても現在における研究者の推測が入らざるを得ず、それ故に（私がやったような）恣意的で都合の良い解釈を導き出してしまふ危険性があります。ただし、現場レベルにおいて人間が行う以上検閲を完全に機械的にやるということもできないので、そこにどういう判断が下されたのかを読み取る作業は文学的なテキスト読解の手法を用

いる必要があるようにも思えます。

二点目の金達寿をもって在日朝鮮人文学を語ってしまうことの問題についてですが、これは上にも書いたように、そもそもが研究対象を選ぶ時点での私の知識不足に起因しています。金達寿を通して在日朝鮮人文学を理解しようとしたために金達寿が自身に設定した「朝鮮と朝鮮人」とに対する日本人の誤った認識を正す」という執筆の動機に、私の議論自体が規定されてしまったのだと思います。

ただし、私が本書のなかで、特に第8章の結論部において、金達寿の小説から見出した「異郷」という空間の可能性とは、「戦後日本」を「多様性を孕んだ空間だった」と評価するための写鏡（あるいは周縁性）の役割ではありません。「戦後日本」を「異郷」と見ることは、むしろ自分たちの生きる空間にとっての中心性が「戦後日本」の論理の中に無いことを示すことだと考えます。ですから、金達寿の文学空間を「日本文学」という中心に対する「日本語文学」という周縁として位置付けるのではなく、金達寿の文学空間を取り巻く環境の一つとして「日本文学」がある、という見立てです。もちろん、こうした私の議論は、在日朝鮮人文学を金達寿の範囲だけで論じており、朝鮮や他の世界とのネットワークの中に置き直した上で在日朝鮮人文学内部の多様性を論じていない以上、言葉遊びのレベルに留まっているように見えてしまうことも理解しています。それに関しては、今後様々なテキストに向き合っていくことで打破していこうと思います。

三点目の「在日朝鮮女性はどこにいるのか」という問題に関しては、宋さんがご指摘の通り「占領期の朝鮮女性のたたかい」を過度に理想化、特権化することで、逆に典型的な「男性／女性」、「エリート／庶民」という二項対立を再生産し、より立場の弱い後者を持ち上げることに落とし所を定めているので、結局の

⁸ 逆井聡人「在日朝鮮人文学と自己検閲——GHQ 検閲と在日朝鮮人コミュニティーの狭間にいる「編集者・金達寿」の葛藤を考える」『「言論統制」の近代を問いなおす：検閲が文学と出版にもたらしたもの』花鳥社、2019年。

ところ安定的な倫理観の上にあぐらをかいているのかも知れません。「文字資料も先行研究もないような在日朝鮮女性たちの日々の生活を想像することこそが、彼女たちの占めた空間を浮かび上がらせる道なのではないだろうか」⁹という宋さんの言葉に佇むばかりです。

これに対しては、現在私が取り組んでいる仕事を紹介することで応答とさせて頂きたいと思っています。私は今、許南麒の「火縄銃のうた」（またカノンですが……）における祖母の語りをどのように評価できるのか、という問題を考えています。従来の評価では、男三代（祖父・父・息子）の抵抗を語り継ぐ民族の母胎としての祖母という、典型的な「支える女」として理解されてきました。それに対して、この祖母の語りを男たちの背景にしないような評価をしたいわけですが、かといって「男たちに負けない主体的な抵抗」というように評価してしまっただけになってしまいます。そのようなどちらが優位ということではなく、互いがいないと成立しないようなより関係的な抵抗の例として祖母の存在を評価することはできないか、という問いが最近の専らの課題です。これが宋さんのおっしゃる「彼女たちの占めた空間を浮かび上がらせる道」と繋がれるかどうか、また相談させて頂ければ幸いです。

改めて、拙著、及び拙稿を詳細に検討していただいたこと、心より感謝いたします。

6. おわりに—「戦後」から離れることについて

この書評会を開催して頂いてから既に一年が経ちます。各氏への応答のなかで既に述べたことではありますが、本書を書くにあたって強い影響を受けた方々からこのような評価を頂いたことは、本当に幸せなことでした。そして、今後の研究のためのいくつかの課題を示して頂きました。この一年で、そのうちのいくつか

は少しずつではありますが、取り掛かれていますので、形になり次第また皆さまにご報告差し上げたいと思います。

その上で、この書評会を経て考えるようになったのは、もう「戦後」から、あるいは「日本」を対象とする研究から離れるべきではないのか、ということでした。本書は、日本の戦後論ですので、当然ながら最終的な結論は「戦後日本をどう捉えるか」という方向に向かったわけですが、こうした枠にはそろそろ限界があるのではないかと感じています。本書では「戦後日本」という枠組みを崩すために「冷戦期日本」という言葉も出していますが、「戦後」を「冷戦期」と言って越境性を意識してみても、結局のところ終着点が「日本」になってしまっている時点で国民国家の枠組みの中に留まっていることに変わりはありません。「戦後日本」を根本的に問いなおすためには、国民国家批判の型からも抜け出さなくてはならない、ということに今更ながらに気がつかされました。

むしろ歴史の中にある様々な抵抗の現場と、現在も身近なところで、あるいは世界各地で続く具体的な運動とを結んでいくことが大事であり、その結び方の方法を考案することの方がずっと生産的な気がしています。特にここ最近の世界は、どこの国もどんどん内向きになり国家体制を強化することに血眼になっていた最中で、この新型コロナウイルスによる混乱が、その閉塞感に拍車をかけています。これからますます国家の枠のなかで個人の身体と生活が監視され、管理されようとしています。そんな状況において、本当に肝腎なことは個人個人で繋がっていくことなのだろうと思います。何か当たり前のことを漠然と言っているような感じがしますが、この書評会で皆さんと対話し、繋がれたことで切に思ったことは、そのようなことでした。

⁹ 宋恵媛「在日朝鮮人の占める空間をめぐる——検閲・カノン・女性」Quadrante：クアドランテ：四分儀：地域・文化・位置のための総合雑誌』第22号、東京外国語大学海外事情研究所、2020年3月。